

# 草の根の国際交流

市民的発想への転換

中塚敏昭（戸塚区役所中和田支所税務課）

## 一 はじめに

「サンディエゴには公園はない、公園の中にサンディエゴがある」と、人々は胸を張っている。そんな言葉がびったりな姉妹都市サンディエゴは、一五四三年、

ポルトガルの探検家ラドリゲスによって発見された当時、見渡す限りの砂漠地帯だったという。今日の美しい緑の港町は遙か数百キロも離れたコロラド川から水を引き、一〇〇余年の歳月をかけて造りあげたそうだ。そんな美しい公園都市の海辺、旧サンディエゴ市庁舎の前に「水の守護神像」が立っている。この像の前に立ち、これが遙か地球の裏側、山下公園にある同形の「水の守護神像」とお互いに見詰め合っているを思うと、胸に熱いものがこみあげるのを感じた。

サンディエゴ訪問は、本年六月号の市内報に掲載された「地方自治と私——市民外交を考える——」という小論を書いた

たことに始まる。それ以来、一人の市民として単なる理論に止まらず、国際交流に実際参加しようと思ひ、友人を誘ったところ快い賛同が得られ、二人だけの市民外交を展開することとなったのである。

八月四日羽田を出発し、ロスアンゼルスに十日ほど滞在した後、十四日サンディエゴ入りした。そこでは、市長室の方から紹介していただいたラドリゲスさん宅と、私が以前お世話になった知人のお嬢さんで二十余年アメリカに滞在しているカイザーさん宅で、合わせて九日間生活を共にさせていただいた。私が当初考えていたように、単なる観光旅行と異なり、アメリカ人の生活に入り込んで体験は、われわれに貴重な財産を残してくれた。私にとっては初めての海外旅行であったが、この貴重な体験を基に、わが横浜市の国際交流のあり方について感じるところを述べてみたい。

## 二 国際交流の性格

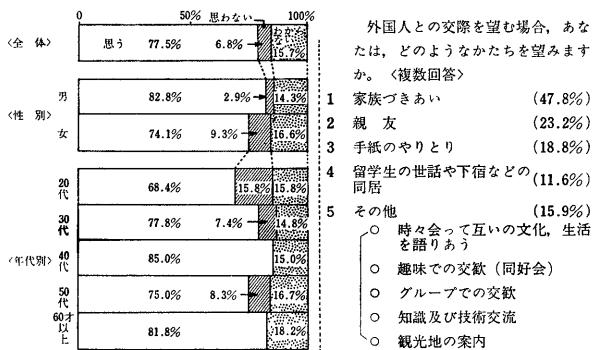
私はまず下書の段階で、多くの方の意見を伺った。その中では、国際交流の定義や目的を明記した。「国際交流とは人間および情報の交換……その目的とは、世界平和の追求云々……」といった調子であった。しかし、この部分についての評判は当然にして良くなかった。国際交流の定義や目的を抽象的に表現することも確かに必要なことだろうが、それはもっぱら学者の研究領域に入る問題ではなからうか。われわれ行政マンにとつては、市民が国際交流についてどのような考えを持ち、それに対し市行政がいかにこたえるべきかが最も重要であると思う。さらに付け加えるならば、市民の意見の中にこそ、そのこたえが得られるのではなからうか。

市民レベルでの国際交流を推進している厚木日本協会の発起人、坂本さんにお

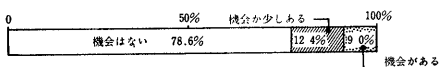
話を伺ったところ、「国際交流の目的は世界中のあらゆる人々が仲よくなることだ」と話しておられたが、まさにその通りだと思う。おそらく多くの市民もこのように考えているのではなからうか。

「世界中のあらゆる人々が仲よくなること」とは素朴な発想ではあるが、政治や権力に影響されない、最も人間性あふれる大切なことである。八月十五日、サンディエゴ市長室で、サンディエゴ・横浜友好協会会長ウェルズさんにお逢いした際に、氏も同じようなことを話しておられた。ここでは、国際交流の主体は市民一人であり、したがって友好協会の活動はすべて市民のボランティアによって運営され、市役所の関与は全く受けていないとのことであった。またその理由を本来国際交流は政治とは関係のない人間的交流であり、市長の交代等によって、その方向や性格が変わってしまうといっためにも、純然たる市民サイドの交流を推

図一 外国人と交流したいと思うか



図二 本市内で外国人と接触する機会があるか



輸入など、他の都市と比較して類のないほど国際交流事業に力が入れられている。だが、残念ながらまだまだ市民が気軽に国際交流に参加できている状態とは思われない。市民が外国人と交流する機会が少ないことが原因として、国際交流が市民の日常生活から疎遠な状態に止まっているといえないだろうか。

これは、本年一月市民局が実施した「国際交流と市民感覚」の調査結果からも明らかといえよう。すなわ

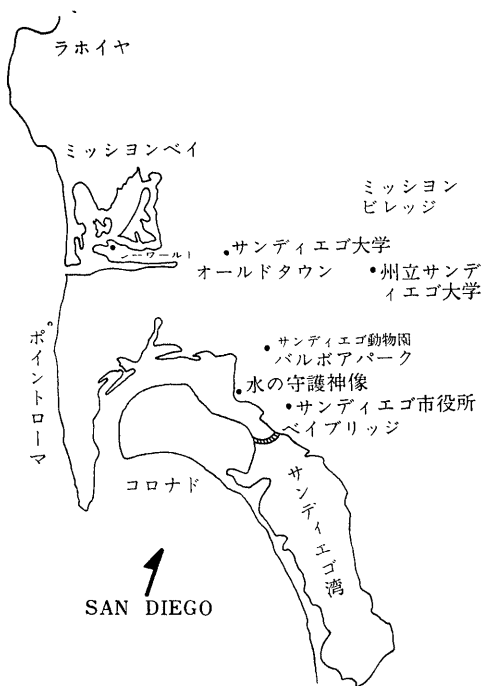
進するのだと話しておられた。このように、本来国際交流は行政とは直接関係のない民間レベルで行われるべき性質のものであると思われる。とはいものの、市民の信託を受けている横浜市が行政の立場で全く国際交流に携わってはならないものだろうか。アメリカのように市民の自治意識が非常に強く、自分達の問題は自分達で解決しようと、ボランティア活動が盛んな国ならともかく、自治意識が弱く、ボランティア活動も活発とは思われない日本の実情では、民間主体の国際交流は育ちにくい。そこ

で急速に日本が国際化し、世界のあらゆる人々が手を取り合って生きてゆかねばならない今日、国民に最も身近にある自治体こそ、なんらかの具体策を実施し、地域住民の国際感覚を育成する助力をしなければならぬと思われる。

三 横浜市政における国際交流の現状

現在わが横浜市では、(1)姉妹都市の提携、(2)各種の展覧会、(3)国際会議場の設置、(4)スポーツ大会や「みなとまつり」(5)各国物産展や一次産品の

図三 サンディエゴの地図



日程表

- 8/ 4 羽田発
- 8/ 4 ロスアンゼルス到着
- 8/ 5 ロス・マンハッタンビーチ市に滞在
- 8/ 9 ロス・クリフウッドストリートのロリンさん宅に滞在
- 8/14 サンディエゴ市ミッションビレッジのラドリゲスさん宅滞在
- 8/15 市長室訪問  
ウェルズさん、市長秘書パークスさんと面会
- 8/16 市議会、商工会議所訪問  
オッコナーさんと面会
- 8/17 サンディエゴ動物園見学  
アン・ホールさん、アート・オールドマンさんと面会  
カイザーさん宅滞在(ポイントローマにある)
- 8/18 オールドタウン・バルボアパーク見学
- 8/18 コロナド、ポイントローマ、ミッションベイ等見学  
セリグマンさん宅に夕食招待
- 8/20 シーワールド見学
- 8/21 ディズニールランド訪問  
夜、セリグマンさんの御家族と夜遅くまで別れを惜しむ
- 8/22 カイザーさん、セリグマンさんら見送りでサンディエゴを去る  
ロスアンゼルスを出発し東京へ
- 8/24 羽田到着

ち、八九人の回答者（市政モニター）のうち、七七・五％が外国人と交流したいと考えている（図二参照）のにもかかわらず、その機会に恵まれているのは、右調査結果から見る限り、わずか二〇％余に過ぎない。（図二参照）

このような現状に対して、市民の日常生活に結びついた、いわゆる「草の根の国際交流」を推進するためには、わが市は今後どのような施策を行えばよいか大きな課題となる。

#### 四——国際交流への具体的提言

国際交流の目標は素朴ではあるが遠大であり、短期間に十分な成果は期待できない。しかし、市行政は一刻たりとも休むことは許されず、目標に向かって一歩一歩進んで行かなければならない。そしてその施策は、市民の誰もが容易に参加でき、かつ継続的なものでなければならぬ。そこで私は、数多くの施策の中で本市の勇氣と決断により、明日からでもすぐ実行できると思われる具体的施策をいくつか提案してみた。

##### ① 国際交流部門の整備

従来の国際交流のあり方を反省し、市民が直接参加できるものにするため、ボランティアを活用した市民主体の交流を

進めることが必要である。したがって、国際交流を担当する市の機関は、情報交換と企画立案の場を市民に提供しうる、開かれたものとしなければならない。このためには、現在、総務局・経済局・市民局に分散されている国際交流部門を統一した「国際交流センター」を、新設が検討されている文化局に設けられるべきことを提案したい。市民レベルの交流は文化的側面が一つの大きなチャンネルとなり、経済を始め多くの部門の交流に発展してゆく性質のものだからである。

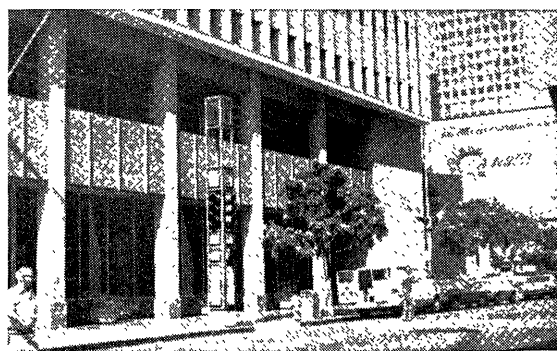
##### ② 横浜市内における国際交流

##### ⑦ 外国人の子供との交流を

厚木日米協会の坂本さんは、独自在厚木米国家庭の子供と日本の子供を集め、雛祭やクリスマスパーティーを開き、まず第一に子供だけによる国際交流からスタートしたと話しておられた。なぜかといえば、「子供は純粋で、国籍や人種にこだわりなくすぐ仲よしになってしまう。大人のような懸引や気使いもないう子供こそ、国際交流の理想に最も適した立場にあるからだ」と。私もこの考えに全く同感である。

さいわい、わが市には二万六千人もの外国人が住み、さらに市内や東京にはいくつかの外国人学校がある。そこで、手始めに、これらの学校と市内小中学校が

写真一 ちりひとつないサンティエゴ市役所



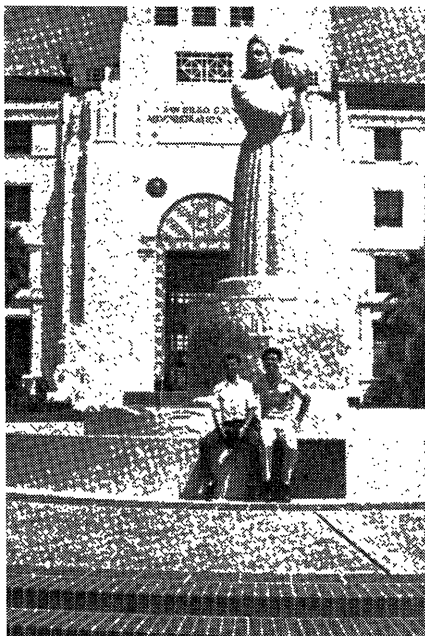
姉妹校となり、図画工作の展覧会・運動会・キャンプなどを合同で開催し、子供に国際交流の場を与えてはどうだろうか。子供の間における交流は、その純粋性・継続性において他に勝るものはない。

##### ⑧ ホームステイ事務局の設置

前掲調査結果によると、外国人との交流を望む場合、家族つきあいがあるものが多く四七・八％を占めている（図一参照）。そこで、市民の協力を得て、横浜を訪れる外国人を家族の一員として滞在させる方法を考えるはどうだろう。風俗・習慣をはじめ、日本の文化を理解してもらえ、最も有効な方法は、外国の人達を市民の生活圏内に迎え入れることと思われる。

今回、私の滞在中も、すべてボランティアによった。実際外国人の家庭に入り込んで生活してみると、夫婦それぞれの役割、子供の躾、教育、接客の仕方などの違いを、直接肌で観察することができた。私はささいなことでもしつこい程たずね、われわれのそれと比較してみた。できるだけかれらと離れず、買物にも一緒にかけた。それ一つとりあげても日本とはだいぶ異なる。ご存知の通りアメリカでは、食料品は週に一度まとめて買う。日本で書物などからこのことを知っていても、なぜそうなのか、わが国のように毎日でかけないのか、実感としてわからなかった。しかし、実際に生活してみると、それは必然的に理解された。つまり、ショッピングの時間を節約しているのである。アメリカの主婦は職業を持っているか、そうでなくともなんらかの形でボランティア活動に必ず参加しており、毎日でかけるだけの時間的余裕がないのである。このように、女性の社会的役割は、わが国の場合と比較してかなり大きいことがわかる。これが家庭における夫の生活に反映している。私がまず驚いたのは、夫がよく家事を手伝うということである。私の滞在したラドリガスさん宅では、ご主人は経営コンサルタントと不動産関係の二つの事務所を経営されている。そして夫人は、カリフォ

写真一 旧サンティエゴ市役所の前にある水の守護神像



ルニア州立サンティエゴ大学の教授をされながら、市の国際委員としてボランティアにも参加しておられる。さらにご主人も、サンディエゴ・横浜友好協会副会長として、積極的にボランティア活動をなさっている。そして夫妻には、二人のお嬢さんがある。これだけ挙げれば、この夫婦がいかに多忙か想像していただけるだろう。職業を持ち、さらにボランティアで活動しながら夫人がひとりできりまわすのは、とても無理である。どうしてもご主人の理解が必要となってくる。男性もこの点は心得ており、女性が社会で充分な行動ができるよう協力し、夫人が料理を作る間は、子供の世話をしたり、テーブルに皿を並べるなど、家事の分担を決め、積極的に家事を行っている。

このような状況も、一緒に生活したからこそ、実感として理解できたのである。なによりも、毎夜充分時間をかけてかれらと語り合えたことが最大の収穫であった。ホテル泊りの観光旅行では、決して味わえないものだろう。もちろん、文化の違いや語学力の不足で多くのミスをおかしたが、かえってそれが好感をもって受けとめられたようだ。

横浜市としては、このたび新設が検討されている文化局に国際交流センターを設け、これを窓口として、外国人の受け入れ家庭を斡旋する方法を考えてはどうだろうか。わが国の住宅は狭く、そのような余裕はないといわれる方もあろうが、多少の無理をすれば、数日間滞在させることは決して不可能とは思われな

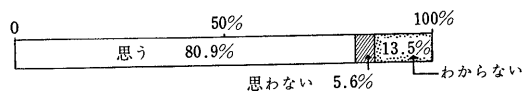
い。そして、狭い住宅でわれわれが生活しているという実情を理解してもらいたい機会となる。それには、半年位前から、相手方との交通などを通じ、滞日中のトラブルを少なくするため、充分な準備をしておくべきことが望まれる。

④ 国際交流サロンの設置

横浜には、年間三〇万人もの外国人が訪れ、市内在住の外国人は二万六千人以上にのぼるが、前に触れたように、これらの人々と気軽に接触できる場がほとんどないのである。そこで私は、この機会を得るため、市内各地に国際交流サロンを設置することを提案したい。サロンの設置といっても、新たに建物を設ける必要はなく、市内の喫茶店・レストラン・地区センター等の協力を得て、外国人や市民が、誰でも気軽に訪れることができる場所が確保されれば充分である。そのため、市が間に立ち特に外国人の理解を得るべく努力する。

当初は月に一度、いずれば週に一度位交流の機会を作り、お茶やワインなどを前にして、リラックスして談話する雰囲気

図一 国際会議場で行われる記念行事に参加したり、会議を傍聴したいと思うか



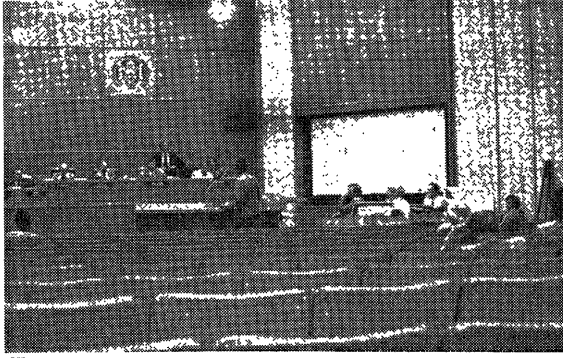
をかもしだすことが必要であらう。

類似の例として、東京では、民間人と各国大使館の協力で、週末大使館内でパーティーを開き、その国の人々との交流をはかっている。しかしながら、サロンの設置をすぐ実現することはむずかしい。そこで手始めに、市内の領事館の理解を得て、本国の人々と市民との交歓会を催してはどうだろうか。この交歓会を通じて市民と外国人の接触の機会をふやし、その上で国際交流サロンの設置へと発展させていくのが現実的だろう。

⑤ 国際会議場の有効的利用

前掲調査結果によると、国際会議についての市民の関心は非常に高く、八〇・九%の人が会議を傍聴したいと望んでいる(図四参照)。こういう人々の期待に応えるためにも、そこでとりあげられる議題は、市民生活に直結したものであることを望む。世界が同質化の現象を辿っている今日、共通の問題を多くかかえていると思われる。それらの中から、現在わが市における、交通・住宅・余暇行政問題等を取りあげ、海外の都市の人々と語り合い、知恵を交換し合うことで、より良い方向へ導けるよう努力することが大切であろう。また、議事については資料を充分整え、会議開催前に市民に訴えることにより、市民の代表や傍聴者の中から、気軽に質問や意見が発表できる

写真—3 サンディエゴ市議会



進行を行うべきであろう。私の訪問したサンディエゴ市議会の運営は、その一つの参考になると思う。サンディエゴ市の人口は七六万人であるが、市議会議員はわずか七人である。そして、市長自らが議長をつとめる。議会では、提出された議題について、議員と市長が任命した民間人によって構成される各種委員会の委員とで討論される。その様子を市民は自由に傍聴でき、議題について質問や意見があれば、手を上げて発表することができる。日本とはだいぶ違った様子であった。

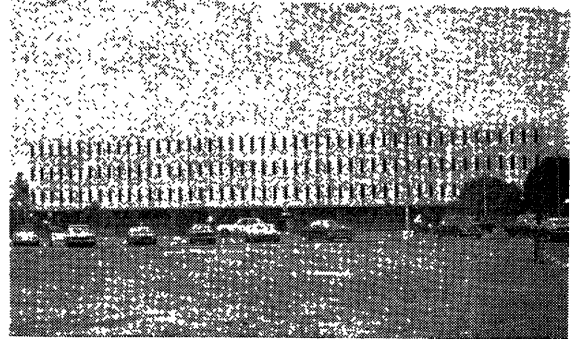
③ 海外での国際交流

市民が海外にでかけ、直接外国人と交流を行おうとするとき、どのような問題があるだろうか。とくに、海外旅行に出発する際の問題について考えてみたい。

問題になるのはⅠまず資金及び休暇、Ⅱ渡航手続、Ⅲ残留家族との関係、Ⅳ宿泊先、Ⅴ語学力などであろう。

Ⅰ資金については、横浜市が市民や企業の協力を求めて、国際交流基金を設置し、使用目的等一定の要件を満たす場合、この基金から低利の融資を行う。休暇については、「広報」やテレビ・ラジオ等で国際交流の意義を積極的にアピールすることで、会社・官公庁等の理解を深め、その協力が得られるよう努力する。これは、最も困難な点の一つである。アメリカではどんな職種でも、二週間から一カ月位は休暇がとれ、旅行などを楽しんでいる。すなわち、このバケーションが生活のリズムに組み込まれており、社会全体がその重要性を認めているのである。日本人がエコノミックアニマルと呼ばれて久しいが、われわれに最も欠けているのは、生活に対する精神的ゆとりではなからうか。一カ月とまでゆがなくとも、せめて半月位は仕事を離れて休暇をとり、海外へ出て異文化を肌で感じ、国際理解を深めることは、われわれの精神的生活を豊かにすると共に、外国

写真—4 サンディエゴ大学図書館



人の不本意な誤解を解消することにもなる。そんな意味で、日常生活の気風が問い直されるべきではなからうか。

Ⅱ手続も市民が直接できるように、たとえば旅券事務所のある産業貿易センター内に、国際交流センター相談室を設置し、助力したらどうだろうか。

Ⅲ残留家族との関係で、主婦が海外旅行するに際し、残る子供の世話を誰がするか問題となる。この夏、浦和市の主婦が一カ月ほど、単身カリフォルニアにホームステイを試みた記事が、新聞に掲載されていた。彼女は子供を実家に預けておいたそうだが、このように夫及び両

親に恵まれた人は稀であろう。そういう面でも都合の生じるときには、市内在住の老夫婦家庭を中心に、一時的にボランティアでベビーシッターの役を引き受けてくれる方を紹介するようしたらどうだろうか。核家族化現象の見られる今日、子供はそれぞれ独立し、年輩いた両親だけで生活している場合が少なくない。これらの人々に生きがいを与える意味でも、さっそく試みる価値があると思う。

Ⅳ宿泊先については、センターに、家庭滞在を引き受けてくれる家庭の名簿を置き、市民がいつでも連絡をとれるようにしたらどうだろうか。

Ⅴ語学力については、海外旅行をする人々の横の連絡をとり、それらの人々が地区センターや青少年会館等を利用して勉強会などを開いたり、市の社会教育の一環として、中学・高校・大学等から講師を招いて、講習会を催してはどうだろうか。

④ 国内外での相互交流

——市大に国際学部の新設を——

国際都市横浜の市立大学に、国際問題を研究する学部がないのは、とても残念である。そこで提案だが、これからの世代を担う若人に国際性を身につけさせ、さらに一般市民にも勉学の機会を与え

る、開放された総合的機能を持つ国際学部が、市大に新設されることを望む。特に研究熱心な市民を対象としては、姉妹都市にある大学と提携して、外国語による大学院修士課程の専門講座を置き、提携大学の修士学位取得の為の単位の半分以上まで、市大の国際学部で履習でき、同大学院へ転籍後、学位取得に必要な単位に加算されるようなシステムにする。さらに、講座開設にあたっては、学生と同時に、市民も働きながら勉強できるように配慮される必要がある。このシステムによる講座は、すでに青山学院大学で実施されており、しかも提携大学の一つは、横浜の姉妹都市にあるサンディエゴ大学なのである。

サンディエゴに限らず、姉妹都市には数多くの素晴らしい大学がある。それらを通じて、将来を担う学生をはじめとして、第一線で活躍中の研究者の交流が行われることになれば、一段と新鮮で継続性のある成果をあげることができよう。

## 五——おわりに

国際交流とは、本来素朴な発想で展開されるべきものであるにも拘らず、華々しい高次元的ものと考える人が多い。交通手段の発達により、国際交流は量的には拡大した。しかし、海外旅行の日数は短く、一時的な観光旅行に止まり、市民生活には直接関係のない、ムード的なものに終っているのが現状である。今後、市としては、このムードを大切にしながらも、どうすれば市民の日常生活に密着させるかを考慮して、具体的施策を実行してゆかねばなるまい。このことは、前に述べたサロンを通じて地域コミュニティの形成に役立ち、また、国際学部を市民に開放したり、語学の勉強会を催すことは、生涯教育の一環となり得ることも忘れてはなるまい。私は、このような国際交流の多目的性を認識した上で、具体的な施策を提案したのだが、これについて

て、当然いろいろなご批判が予想される。国際交流は、理想的には完全に民間人の手で行われる必要があるが、従来、上から一方的に与えられてきた歴史を持つわれわれが、個人の生活圏内で把握しきれないでいる現在、どこまで行政が関与し、どの部分には関与すべきでないのかについて、論議の別れるところだからである。

これまで、本市がなし得る具体的施策を中心に述べてきたが、「草の根の国際交流」の主体たる市民が、市に何を求めるかのみではなく、自らその為に何をなし得るかを考え、実行することこそ、重要な課題ではなからうか。

このような状況で、私は、今までの市行政のあり方を転換し、市民的立場からの発想を展開した。

サンディエゴ空港には、カイザーさん、セリグマン夫妻とのお嬢さんが見送りに来てくださった。今回の旅行で、これらの方々をはじめとする、多くのサンデ

イエゴ・ロスアンゼルス市民の暖かいもてなしが、最も印象に残っている。この小稿が、現地でご厄介になった多くの方々、そして渡米に際し、暖かい支援を賜わった外事課・国際交流課、及び中和田支所の皆さまに、わずかばかりの恩返しとなりうれば幸いである。

山下公園にある、サンディエゴ市民から贈られた「水の守護神像」をみるたびに、当地での出来事の一コマ一コマが思い出される。今日もこの像は、「友好の守護神」に生まれ変わったかのように、暖かくサンディエゴ市民を見守っている。

### 参考資料

「国際交流と市民感覚」

昭和五十二年一月

市政モニターアンケートのまとめ

市民局相談部広聴課

文中において調査結果とは、本調査の結果を示す。